

その頃の思い出 (91・11・18)

——配属将校・殴打事件——

西田 美穂 (昭16文甲入学・昭17中退)

曾ての配属将校殴打事件を起した本人として、何か話してみることがないかと、安部英夫さんから、この会での話を再三奨められました。

私としてはこの事件により三高を除名された者であり、その後、皆様の温いご友情により三高同窓会の名簿に名を連ねさせて頂き、感謝致してはおりますものの、やはり何か一步退き、遠慮すべき点があることを常々感じております。

また、すでに五十年以前のこの事件を語ることに、どんな意味があるのか？少しでも何かのお役に立てる点でもあるのか？と自問自答致しました。

ましてその事件本人が、このような大それた事件を起した人物としては、現在も中小企業に勤務しているパツとしない人物であることも、このような場で話すことにためらいを感じさせまし

た。

しかし、この事件そのものについて多少の誤解もありますので、本人があるがままを全てお伝えし、あのような事件が起る訳が少しはあったことを理解して頂くことも、私に許されることかな?とも存じました。

そこで今までに余りお話したことがなく、神陵史に私の手記として載っておりましても触れられていない、事件前後のことを補足の意味でお話したいと思います。

事件から時間を溯らせて頂きます。昭和十六年十二月、太平洋戦争突入の少し前、十一月半ばの夕刻のことです。当時文一甲二の私は自由寮北寮二番に居りました。その同じクラスの私の席のすぐ後の、同じポト部の、寮ではすぐ隣りの北三に居た野田公彬君とは親しくしておりますので、その日もいつものように寮の夕食を終ると、二人で京極の街の方に散歩に出かけました。広いグラウンドの南側を通り、市電東山通に出る西門の方へと薄闇を歩いて行きますと、そのグラウンドの方から背の高い軍服の影が、すたすたと大股に、そして将校長靴を地面に引ずるようにして近寄って参ります。

「おい、待て！」とその大きな体格の配属将校の声が私たち二人にかかります。一年生の軍事教練の時間には直接関係はしていませんが、野外の演習訓練の時などには彼がわざわざやってきました。古くから居る温厚な「風船」と綽名された中佐や、若い大尉に比べて、生徒からは敬遠

されていることで有名な草川大佐です。

私は「しまった！」と思いました。当時、生徒全員に長髪禁止命令を勝手に出していた大佐です。卒業を控えた三年生も寮の二年生も多くが髪を短かく刈っていていく中で、一年生の私は反発して髪を自然に長く伸ばしたまま、しかもその時制帽は被っていません。

立ち停った私に「何年何組の誰だ！」と怒鳴ると、手帳を出して私の答える氏名をメモします。「いいか！ 明日までに髪を切つて来るんだ！ 時局をなんと心得とるのか！」と威丈高に一喝されました。全く野田君といっしょに逃げ出すこともできないタイミンクの悪さでした。やはり前に大佐に見つかつて、頭を丸坊主にしていた野田君が私に同情します。「運が悪かつたな」「仕方がないか！」私は呟やきましたが、どうにもこういう威丈高で一方的な姿勢には、腹の虫が治まりません。「よし、大佐の家に行こう」と思ったのはその夜でした。寮の二階図書室で職員録を調べ、深草に在る大佐の住所をメモすると、翌日の授業が終つた後、四条大橋から京阪電車（だつたと思いますが）に乗り深草駅で降りました。高い朴歯の下駄をはき、頭髪は伸ばしたままです。

たしか深草に連隊があり、その敷地に近い将校官舎の一つであつたと思います。木造二階建のきちんとした家です。根は臆病なくせに反骨心が強くて向う見ずな私ですが、大佐の家の表札を見た時、正直に言つて改めて出直したい気持になりました。それでも私は、決心して玄関の格子

戸を開けました。

「草川大佐はおられますか？」しばらくして玄関より奥の部屋の方から、軍服の上衣を脱ぎかき色の軍袴に真白い木綿靴下をはいたままの、学校から帰ったばかりと思われる大佐の姿が動きます。「だれだ」

私が名乗り「なぜ髪を薙らねばならないのか？ その理由を聞きにきました！」と張り切って答えます。学校で決めたことでないのに、なぜ軍人が命令するのか？ という点がもともと私は不満でした。そしてこの草川大佐着任以来の一方的恐喝に、誰も反論しないのが残念でした。たとえ怒鳴られても、問答無用と追い返されても、反論の姿勢だけは今日こそ見せておかなければ、と思いつめていた私でした。しかし、大佐の態度は意外でした。

「なに！ そんな事で来たのか！ とにかく上れ！」その時の彼の気持は判りません。私の臆測ですが、彼も若い者は決して嫌いではなかった。しかし三高に赴任してからは誰一人訪ねて来る生徒はいない。そこへ私が行ったのです。長髪問題がどうのこうの……とつまらん事を言っているが、暇つぶしに相手をしてやろうと、彼は考えたのではないかと思われます。

校庭で見るあの偉丈高さは、彼の態度の端々に相かわらず見られるものの、「お前も話したいことを話せ。俺も貴様たち三高生に言っておきたいことが一杯あるんだ」といったような前置から始まり、彼は六畳ほどの奥の和室に私を導き、坐卓をはさんで私と向い合って坐りました。転

勤の多い官舎住いではあるにしても、部屋に家具一つないような質素さは意外でした。生徒からは鬼のように恐れられていた大佐の別人のように悠然とした態度に、私は内心ほっとし、このように対してくれた大佐を理解したい気持ち湧きました。

「どんな本を読んでいるのか？」から始まり、一時間を超える対話というより、彼の三高教授陣への非謗を含む精神腐敗論であり、皇道哲学的熱弁でした。

「長髪がどうのこうの……と小さな事にこだわって、トゲトゲした気持を持つな。若いから仕方がないが、若い者はその棘を自分で包んで行って円いものにしなければならん……」気持がほぐれると、過去の戦場での自分の危険な体験や人生というものを、私という久しぶりの話し相手に話す大佐の寛いだ一面を見るにつけ、私の彼に対する評価が少しは変りました。物静かなお嬢様からの緑茶も頂き、心も暖かくなりました。夕食近くなるので、その大佐の家を辞する時には、私は彼の軍人なるが故の三高生に対する強硬姿勢も理解するようになりました。対話の間も、終ってからも、彼は私の長髪については何も言いませんでした。私は寮への帰り途、なおいまだかまりは残るものの、まだ店を開いていた床屋で長髪をさっぱりと刈りました。

そういうことが、私の殴打事件の二ヶ月程前にあつたのです。こうして大佐を訪問し、大佐の心の一端に触れていたことが、事件の日に大胆に彼に向かって行く道を開いたのではないかと、自分で今想わされるのです。

それから二週間ほど経ってあの太平洋戦争が開戦されるのです。十二月八日の開戦の日は、私は長髪の自由を失なつたまだ複雑な気持を抱いて、大津市石山寺に近いボート部合宿所に部員として宿泊していました。その日十数人の合宿者のうち、私と誰か二人だけが、学校の講義に出席せず、二学期末の試験準備をしていたように思います。

午後三時過ぎ慌しく合宿所に帰って来た野田君たちが、「おい！　とうとう日米戦争が始まつたぞ！」と、京都から大津へと電車で帰る途中で手に入れた号外を見せました。何かを真剣に考えねばならない時が来た、という引き締つた気持を私も持ちました。二年生の呼びかけで夕食後、すぐ近くの京都大学のボート部合宿所を訪ね、開戦のラジオ放送を聞かせてもらいました。何度も繰り返し返される臨時ニュースの甲高い声、天皇みずからの詔勅の放送、戦果の大本営発表……。恐らく今ここに居られるお一人お一人が、あの十二月八日を振り返ってみます時、それぞれに異なつた複雑なお気持を抱かれたのではないのでしょうか？　天皇の玉音放送を正座して聴き、涙を浮べた純情な先輩も居たと思いますが、正直に言つて入学して一年も経たず、憧れの自由寮での青春謳歌の夢のさめない一年生仲間には、「日中戦争も長引いているのに、その上とうとう世界大戦が始まるのか？　西洋史で学んだ近世ヨーロッパの三十年戦争以上、いや百年戦争になるのかも知れないな？」という暗澹たる気持が、多かつたように思われます。

京大合宿所からの帰り道、夜の暗闇を流れる瀬田川の平和な波の音を聞き、やや遠い瀬田の鉄

橋を光りながら長々と渡って行く夜汽車を眺めながら、私は野田君に語りかけました。「自由寮の統制も益々厳しくなるだろうな：」「自肅だ、自肅だってこの頃の寮は、面白くなかったな。SもAも寮を出たし、俺たちも出ようか？」そんな話を致しました。そんな話をするくらい、自由寮の生活にも気儘な自由は許されなくなり、戦時体制に沿って行かなければ、ならなくなってしまう。それは当然なのですが、寮生の中には一年生でも頭脳抜群で洞察力のある秀才が多々居り、日本帝国主義の間違いと軍閥政治の危険性を聴かされておりました。従って国家の戦時体制に盲目的には従って行けない気持が致します。私にとつて自由寮の生活は、開戦後だけに憧れのものでなくなつて行きました。合宿が終り、二学期が終り、一月に寮に帰つた頃、寒い自習室での議論の中心は、哲学者田辺元著の「歴史的現実」の標題そのものであり、現実を否定即肯定と言つた観念論で割り切ろうというものでした。寮の便所の落書にヒットラーの「わが闘争」の書への讚美があるのを見て、がっかりしたのもその頃でした。

昭和十七年、太平洋戦争の戦線は拡大し、学校で軍事教練を担当する配属将校にとつては、特に身の引き締る思いのする決意の年であつたと思ひます。

しかし、自由の精神に養われた三高生は、軍事教練の必要性や重要性には本来懐疑的ではなかつたか？と思われまふ。そうした態度は、比較的新しく赴任した配属将校にとつては、苦々しく思われたに違いありません。

私はその頃、寮を出て喫茶店「カロ」の二階に寝起きしていた文丙の鈴木宗夫君を訪ねて、フランス象徴派詩人について語ったり、吉田神社のすぐ傍の家の二階を借りていたクラスメイトを訪ねては、彼の哲学批判を聴いたり、戦争など余り意識しない日を過しておりました。事件当日の前夜も寮二階図書室で晩くまでニイチェの本を読んだりしておりました。寮の二階寢室の廊下を廻って来る朝の太鼓の音に、いやおうなく眼を覚され、顔を洗い食堂で朝食を終って自習室に帰って来たものの、朝からの教練には気が進みません。しかし、一、二年生合同の軍事教練査閲の予行練習ということで、同室の二年生も出席の準備をしており、「みんな出ろよ」と声をかけます。入寮した頃からはずいぶん変わったナ、という気がしました。何故か、嫌な予感がしながら寮入口の下駄箱室で皮靴をはき、ゲートルを巻いたのを今も覚えております。

広い運動場の校庭には、帯剣をつけ歩兵銃をそれぞれ手にした生徒が、各クラス縦二列ずつに集まりかけ、若い配属将校大尉の「全員集合！ 整列！」の高い声に従って整列しつづつあります。初めての合同の教練で、予め指示も受けておりませんからどう並べよいかと、列の前の方とはかく、後ろの方に行くに従ってごたごたとしております。

「大佐殿からの訓辞がある。隊列を整えよ。整列！」二度、三度大尉の声が約四百名の生徒の上に響きますが、きちんと軍隊式に列ぶことにそれほど価値を見出していない三高生の反応は鈍く、隣りの列の移動につれて乱れたり、前後のぶつかり合いが起ります。

この時、校庭より高く、大尉より更に一段高い新校舎の敷地から、この全体の状態を見ていた草川大佐の怒声が突然飛びました。

「貴様たち！ いつになつたら整列が出来るんだ！」という意味の言葉であつたと思われまゝ。言葉だけでなく、長靴の足で地団太を踏むようにして、一メートル八五の長身全体に怒りを現わします。そのような大佐の怒りのパフォーマンスを見慣れている生徒達はくすくすと笑うだけで、さほど効果はありません。そうすると、この時ばかりは形相を変えた大佐が一段高い所から「この列の後方で、そうだ、今うしろを見た貴様！ いつまでふざけているんだ！ 前へ出て来い！」と叫びました。そして私の並んでいる文一甲二の左側五列目程の後方を彼は指さしています。その権幕に生徒は少し静まりました。しかしその指された列から誰も出て行く者はありません。いらだつた大佐は急に一段下に降りると、つかつかとグラウンドの列を分けて入り、中程よりやや後に来ると、いきなり一人の生徒の肩を、左手に支えていたサーベルの鞘を振り上げて打ちました。

「貴様だということが判らんのか！ 前に出ろ！」やや狂気じみた大佐の怒りであり、遠くからふざけている生徒を確認できる筈のない誤認でした。納得できないその生徒は不満の表情で、飛ばされた眼鏡を拾い、大佐のサーベルの鞘の先で背中を突き立てられながら、最前列へと連れ出されて行きました。

これから後、大佐の得意な時局講話や、戦時下の三高生の軍事教練態度への罵りが始まります。その話の間も、一人引き出された生徒への難詰やサーベルでの体罰は止みません。三高生で今までこのような体罰を衆人環視の中で受け、恥かしめを受けた事例があったでしょうか？ それにも動じないその生徒を、上半身裸かになってグラウンドを一周し、体を温めて来るように命じた大佐の傲慢な態度を見た時、私は約二ヶ月前に会って評価し直した彼の、やはり変わらない軍人的本質に裏切られた気持が致しました。生徒の非難の聲が、隊列の中で次第に渦巻いて行きます。私の義憤の感情は、私の理性をどこかに真白に消失させて行きました。一矢報いずにはおれない感情の高ぶり……。しかしそれがどんな結果をもたらさずであろうことを考えない訳ではありません。それでも感情に走ってしまった私の根底には、大佐個人への憎悪というよりは、時代そのものへの悲劇的な抗議があったように思われます。

「馬鹿野郎!!」と全身で叫んでから、私が出て行き、持っていた歩兵銃の台尻で大佐を打った詳細については、ご覧になられた方もこの中に居られるわけで省略させて頂きます。前に一度会っておりましたが、誰よりも大佐に向って私を進み易しくしたのでは？ ということは先程申し上げた通りです。

一撃を大佐に加えることで、私の感情の爆発は終わりました。私を見て一瞬驚いた表情の大佐を、私は興奮の最中にも見ていました。私は打ちたくない人を打った哀しみのようなものも、心に感

しました。私はすべてが終ったことを、そして自分の三高生活も終ったことを直観しました。

なおも興奮のさめない中で、「こんな教練など受けられるか！」と大佐に向って叫び、帯剣をほどき、歩兵銃と共に地面に投げ捨てました。そこまでは緊張のうちにも、落着いた役者でした。

しかし、その次の瞬間から、何の目的もなくなくなった私の眼に、怒りと恥とに震える大佐の眼が映りました。「貴様!!」反撃に転じた大佐の絶叫に、私は身を守るため、敏捷に新徳館に入る通路の方に逃げ出していました。結局は感情的な暴力に訴えた自分の弱さの全てが、そこに暴露されました。舞台から走り去り消え行く私の背中に、観衆の失笑がどつと浴びせられるような、虚しい気持が致しました。

それから、あてもなく吉田山まで登って行ったことは、手記にも書いておきましたようにご存じかと思えます。一月の静かな吉田山の頂上に出て、松林越しに私が眺めた三高の校舎は、もう遠い別の世界の建物のように見えました。虚しく疎外された一人だけの自分を眺め、これからの自分の生きて行く道をいろいろと考えました。真実に生きたい。詩人として生きたい、などというまだ甘い考えもありました。一時間以上も寒い山頂に居たと思います。学校や寮の近くには捜索の手が伸びているのでは? という心配もありました。夜になってから寮に帰り、荷物をまとめて大阪の実家に帰るしかない、そう考えておりました。

やがてその吉田山を降りますと、真如堂の方に向う散策コースがあります。脚に巻いていたゲ

ートルを取り、その道を歩む途中、ランケ著「世界史概観」の翻訳でも知られている三高教授の宅があるのに気が付きました。講義は受けておりませんがお会いしたいと思って、寮の友達と訪ねたのは、ちょうど前日のことでありました。その時は先生がお忙しいようなので、近くに下宿を探しておりますので……と、遠慮致しました。私は夜まであてもなく歩くより、今先生にお会いできれば、自分が起した事件のことを全てお話したい気持ちになりました。

呼び鈴を押すと奥様が出られ、来意を告げますと、和服の相原信作先生が玄關の間に二階から降りて来られました。私が事件の事実を申し上げますと、あの温厚な先生が別に驚いた風もなく「そうですか……遂にやりましたか……」とうなづかれます。その言葉に私は何故か救われた思いが致しました。「とにかく上りなさい」と和室の客間に先生は私を迎えられました。冬の京都のことですから、奥様が火鉢に炭火を移しに来られます。奥様に私のことを話し、その火鉢に手をかざし、時々火箸で灰を掻き廻しながら、先生は私を前にしてじっと考え込んだままです。

「やりましたか……」やや甲高い声で先生の口から出る言葉はそれだけです。「はい」

まるで禅問答のような二人の無言がそれに続きます。先生はその時私のために、これからどうするのが一番良いのか？一心に考えておられたのでしょうか。しばらくしてから今度は顔を上げて私を見て微笑まれました。「やりましたか……」「ええ、我慢できなくて……」

私はすっかり緊張を解いて、どうして私のような者が大佐に向って行くことになったのか？

生徒の一人への度を越した暴力を見かねたこと、などを申し上げました。

殆ど初対面の私に対して端然と、しかも暖かく応待して下さった相原先生によって、事件直後の動揺していた私の心は、どんなに励まされ、勇気づけられたことか判りません。(それから後も、戦後復員してからも、ずっと今まで先生との文通は続いております。)

私は雑煮の昼食を頂き、私の生い立ちから三高入学までの全てを話しました。先生も三高の先輩であられ、京都府上嵯峨出身であること、その他色々と苦勞の多い人生であったことを語られました。そして先生の三高生への評価は高く、そうした評価のできない軍人を歎かれました。冷静に淡々として語られる先生に愛がありました。哲学書にも話が及んだ時、そして独逸語は好きで原典で読みたいというような話を申し上げますと、先生は立って隣室の書齋の方に行かれ、ニイチエの「この人を見よ」の原書を持って来られ、私に下さいました。(私は頂いたそのレクラム文庫を、長く記念として持ち、読ませて頂きました。)

それから尚色々なお話を伺い、部屋の襖を明けて這い這いをして入って来られた幼いお嬢さんに、私も思わず微笑ませられ、夕方近くまでお邪魔をしてしまいました。

先生の宅を辞して寮へと帰る途中、逮捕されることも怖れず、学校を去らねばならない覚悟はすでに出来ていました。事件直後にこのような三高先輩教授にお会いでき、決して甘い事はおっしゃらず、しかし私という人間への信頼を以て励まして下さったことは、それからの私の辛い人

生の道程を思う時、本当に有難いことでありました。

暗くなつてから北寮二番の自習室に帰つた時、姿を消したままの私を案じた寮生が詰めかけていました。捜査が身辺に及んでいるのでは？ といった心配はないようでした。それでも皆に迷惑をかけないよう、荷物をすべて片づけて家に帰る支度にかかりますと、「どうしても学校を辞めるのか……」と隣室の野田君たちも心配しながら荷支度を手伝ってくれます。

三年生の村林保彦室長が、寮の別室で私の事件について協議していたのが帰つて来ました。本人の私以上に、事の重大性を感じていた彼は緊張した顔です。わざわざ長い煙管で煙草を悠然と吸いながら、ユーモアを飛ばしていた普段の顔はありません。

「飛んでもないことをしまして……」 詫る私を彼はさえぎり、「いやいや……誰にでも出来ることじゃない……しかし、もう少し学校の動きを待つてからにしないか？」と、暖かい励ましの言葉でした。北寮五番にいた富塚良三君もクラスメートとして馳けつけると「君は巨人ゴリアエに石弓で立ち向つたダビデだよ」と私を評価します。しかし私は表情も固く、心は皆にこれ以上迷惑をかけない事と、これからの自分の事で一杯でした。

家に帰る支度ができ、トランクに必需品を詰め、書籍や寝具を送る手配を頼み、皆に別れを惜しんで寮を出ました。寮から続いている学校敷地の、朝事件を起した運動場には暗い闇がただ広がっています。今歩いている自分が夢であつて欲しいと願つても、夢ではありません。野田君と

富塚君とが私の荷物を持ち、東山通りの電停まで見送ってくれました。たとえ三高を去っても、いつまでも覚えていてくれるであろうこれら友人の存在も、それからの私の心の大きな支えでありました。

こうして事件のその日のうちに寮を去り、大阪の実家に帰った私は、事件後の寮や学校や軍隊で、私に関してどんなことが論じられ、処置されようとしていたのか？　と言うことについては全く知る由もありませんでした。況して、寮の村林室長を初めとする上級生の京都師団長への直訴のことなど聞き知る機会はありません。この上級生達の助命運動は後で述べますが、東大・京大への入学試験を控えた三年生達の軍との折衝であり、その献身的な熱意が師団長の心を動かし、私を、私は極く最近、七年前、村林兄が亡くなる前の年、お邪魔に上った小石川のマンションでご本人から初めて明らかにして頂くこととなります。知らないでいる、ということの罪の深さをその時痛感した次第であります。

私自身は事件後、十日目の二月二日に、学校に呼び出しを受け、母と一緒に京都に参りました。私自身は退学を当然のこととして受け留めておりましたが、九州生れの気丈な母は、私の行動が決して悪くないとして学校側に歎願をする積りでいたのです。しかし校長室の前で待たされ、教頭格の教授から、軍の厳しい追及を避けるための措置である旨の説明があり、退学処分よりも厳しい除名処分の申渡しを受けました。冷たい風の吹く吉田神社通りへと一緒に正門を出た母の、

氣落した髪の乱れを、私は今も忘れることはできません。

そのあと、二月半ばに京都の憲兵隊から、大阪の自宅に出頭命令が参りました。大佐に打ちかかるような向う見ずな所がある私ですから、その命令を何とも思わずに出かけましたが、同行する父の顔色はありませんでした。出頭時間どおりに憲兵隊に着きますと、幾つかの部屋の一つに私は訊問を受けるために招き入れられました。父は別の控室です。中尉クラスの憲兵将校が二人、そして下士官が机と席に着いている前に私は連れて行かれました。氏名を確認し、事件の概要を読み上げ、間違いはないか？ と問い糾します。答えると「動機は何だ？」と、比較的若い将校がさほど厳しくなく尋ねます。私は草川大佐の度を過ぎた生徒への暴力について卒直に述べました。「普段から大佐を憎んでいたのか？」「いいえ」と私は答え、大佐の自宅を訪問した一件も述べました。「要するに……それで血気にはやった、という事か？」「はい、そうであります」「……それで、三高はもう除名になったのか？」「はい」、「少し、可哀そうだな？」「いいえ、私が出過ぎたことを致しました」、「……うん……よし。帰れ」こんなやりとりがあったことを記憶しております。本当にこれでいいのか？ と、拍子抜けする程の形式的な訊問で、すぐに終りました。控室で待っていた父が青ざめて「終わったのか？」と尋ねます。「何もなかったよ」と安心させて、私は父と家に帰りました。

憲兵隊での取調べがこれ程簡単に終わった主な理由は、やはり問題の多かった大佐が相手であつ

たからであろう……。私はずっと後々までもそのように想って来ました。それ以外には何も考え及ばなかったのです。

こうして三高を去った私は、やがて昭和十八年十月、仙台の東北大学法文学部哲学科に聴講生入学。翌年本科生となったものの、それも束の間で十二月には現役兵役召集により、内蒙古の第一線に派遣され、終戦後復学して昭和二十三年三月にやっと卒業するという道をたどります。三高時代のクラスメイトや寮のメンバーが懐しい平和な時代になっても、私は殆どの友人と遠ざかっていました。

その私が昭和三十年三月、仙台の高校で社会科教師として勤務していた時、たまたまその学校で紛争が起り、教員組合員同志が衝突する、という事件がありました。そして地元新聞一面に大きく報道され、私も執行委員の一人として警察に出頭させられました。

調書室での応待の警察官は丁寧で、嫌なのは調書の確認のあと拇印を押すことぐらいでした。終ると、「ぜひお会いになりたいという方がお待ちですので……」と庁舎の廊下づたいに警部に案内されます。二階の宮城県警本部長室に参りますと、室内から聞えていた碁を打つ音が止み、ドアが開いて「よう！」と出て来たのが、本部長として赴任して居た北寮二番室長村林兄であります。思いがけない、事件以来の再会でした。

彼は昔のままに陽焼した精悍な表情を緩め、破顔一笑し、「どんなに君のことを心配して探し

ておったか！　しかし……とにかく会えて良かった！」と、心から再会を喜んでくれました。

夕刻あらためて料亭に呼ばれ、ビールを汲み交わし湯豆腐の鍋を二人でつつきながら、例の事件後のそれぞれの人生の歩みについての話は盡きませんでした。その席で、「遠慮せずに三高同窓会に出ろ、会いたがっている者が居るぞ……」と私は励ましを受けました。学校紛争に嫌気がしてその年の夏、私は東京に帰りますが、その頃には村林兄のはからいで故人となられた鈴木常夫兄にも紹介され、学士会館での東京三高会に初めて出席させて頂きました。その時はこっそりと身を秘して参加させて頂きましたので、特に私に気付かれる方はありません。十数年ぶりの寮歌斉唱に、私は青春謳歌の頃の自分を取り戻し、心は同窓の皆様の友情への感謝で一杯でした。

そうして、少しずつ懐しい同窓の方々にもお目にかかるようになり、防衛庁、警視庁、警察大、警察庁の各要務を担当して昇進して行かれる村林兄のお宅に、私はよくお邪魔をするようになりました。

しかし、私の事件直後の京都師団長への直訴という、ご自分の献身的な努力については一言も聞いたことはありませんでした。磊落であると共に純情な照れ屋でもあられた彼は、結果としては私を救済し得なかったご自分の努力については、多くを語りたくない気持を持って居られたのでは？と推察します。

ところが先に述べましたように七年前のことです。札幌に長く勤務するようになって居ました

私が小石川の村林兄を訪ね、長女の東京での就職の件をお願いした時でした。

その頃は現実の政治社会について話し合うことはあっても、戦前のことなど話さなくなっていた私達でしたが、別な戦時記録を読んだ私の質問から、村林兄が今まで私に話されなかった事件直後のことを聞く機会を得たのです。そして、あの事件当日から三年生の五、六人のメンバーが、たいへんな努力を積み重ねられたことが初めて私に明確にされました。

太平洋戦争の最中での、陸軍の威信を傷つける事件でもある三高生の軍人殴打問題については、配属将校派遣母体である京都師団の最高責任者に隠便な処置を直訴するしかない。そうしたメンバーの結論も、師団長に面会する方策については行き詰ってしまいました。メンバーが師団に押しかけて行って陳情しても、恐らく会わせて貰える可能性はありません。その時メンバーの一人が思い出したのは、三高生の友人が禅宗の寺の貫主の息子であること、そして師団長も時々参禅に来るということでした。この思いがけないルートを活かして師団長直訴の機会を早急に実現するために、メンバーは卒業試験の勉強もそっち除けて奔走しました。そして何日かの後に、村林室長を初めとするメンバーがその禅寺の一室で対面することができたのです。

参禅をたしなみ、三高生の父とも親しかった陸軍中将ですから、メンバーの三年生の熱情溢れる、軍の穏便な対応の陳情に耳を傾けてくれたことは確かでしょう。しかし、簡単に答が出せる問題ではなかったはず。事件を起した人物について聴き置くだけでした。

そしてやがて三高では私の除名処分が告示されました。陳情に奔走した三年生のメンバーの虚しい敗北感は想像に余りあります。せめてもの慰めは、草川大佐も後に、福井県に転任せしめられたことを知ったことでしょう。

村林兄からこの事実を聞いた時、私の記憶に閃いたのはあの憲兵隊での簡単な取調べのことでした。少なくともマルキシズムの図書を読んだり、持ったりしていないか？ という詰問も当時必ずあったはずです。もっと執拗な取調べがあるはずです。しかし私自身が面くらう程の形だけの訊問でした。師団長からの指示以外には考えられません。そして、村林兄他の三年生のメンバーの陳情は、決して無駄ではなかったのです。それから更に私は、東北大に入学したり、軍隊に入って所属部隊が替ったりするごとに、要注人物としての呼び出しを受けました。そしてしかも不思議なことに睨まれる、と言うよりも励ましを受けたのです。昭和二十年終戦の夏には、北京の士官候補生隊に居りました。

私は思わず畳に坐り直し、改めて村林兄にお礼を申し上げました。事件後四十四年目に知る新事実なのです。

「今の今まで、そんな先輩達の私への支援があったことを全く知りませんでした」

そして私も憲兵隊での取調べのことなどを詳しく伝えました。

「いやいや、俺達も力不足だった。俺達の良い勉強になっただけだよ」そう言って謙遜に過ぎ

し日を振返る彼の人柄に、本当に私は頭が下りました。

事件を起した本人の、取りとめのない話を以上申し上げました。自由と真理とフマニズムとを目ざす良き教授達と先輩達とによって培われた、三高の素晴らしい校風の一端を、私なりにお伝えしたかった訳であります。その伝統の中で、戦時下の短かい一時でも私が過し得たことは本当に幸せでした。このような者の話を長時間お聞き下さいます、本当に今日は有難うございます。

(後記)

話の当日は充分な用意もなままに、思いつくままに話しましたために、筆記録を読んでこれでは到底後々まで残して頂くようものでないと感じました。それでお伝えしたかった新事実などの内容はそのままですが、話の前後を大きく変えて時間順序の記述とし、読み易くアレンジしました。身勝手をご容赦下さい。